水芭蕉（みずばしょう）

七月上旬の白馬栂池高原(長野)は千島桜や高山植物がいっせいに開花する春である。しかし春の花が咲く高原にも梅雨がある。七月一日、私は雨の中をゴンドラに揺られながら標高二千m近い高原駅に着いた。

合羽を着て歩き始めて驚いたのは残雪の多さである。同じ時期に何度かここに来たが、これほど大量の残雪を見るのは初めてだ。花の盛りは、半月は遅れているはずだ。しかし最も早く開花する水芭蕉は今まさに盛りを迎えていた。何mもの積雪の重みに耐え、雪解けと同時に開花するこの花の逞しさと、けなげさと、気品を感じる。

雨に濡れた木道を歩きながら、私は霧の晴れ間に小蓮華山が運よく見えてくるのを期待していた。NHKドラマ『坂の上の雲』のエンディングで、この山の尾根道が映し出される。私は毎回それを見ながら、「どこかでこの光景を見たはず」と首を傾げていた。しかしこの日の朝見たゴンドラ駅のポスターで、それが小蓮華だと判ったのだった。大雪渓↓　白馬岳↓　小蓮華山↓　白馬大池のコースを歩いたのは八年前である。

「なぜ山に登るのか」…　説明するには難しい問いだ。「しんどいけど、心地よいからだ。それに加えて何か心を惹くものがあるから…」無理をして応えると、きわめて不十分だが、私の場合このような説明になる。テレビ映像となった小蓮華山の道は、その心惹く何かを、私の心に呼び起こす。

山から戻って、私は、梅雨の晴れ間の畑の草取りをしていた。肌を刺すような強い陽射しと蒸し暑さ、加えて同じ姿勢をとり続けることによる腰の痛みを感じていた。だが、そのつらさは長くは続かなかった。

隣りの畑から、まだ三歳になるかならないかの男の子の、可愛いお喋りが聞こえてきたからだ。老夫婦がこの子を預かり、畑仕事をしながら、守をしている様子だった。「トウモロコシ　とりたい」と子どもの声、「まだはやい、熟れたら食べようナ」とおばあさん。「おいもさん　ほりたい」「おいもさんは　秋になってからナ」など、可愛い会話が続く。「こらこら、悪いことばかりせんと。ほら、トマトとってあげるから…」と、おじいさんの声。…　私はこの何気ない会話からくる、大きな癒しを感じていた。

「一人の赤ん坊が十人の大人をあやす」という言葉を思い出す。赤ん坊をあやしているつもりかも知れないが、実はあやされているのは大人の方かもしれない。長女の婚家の父が急逝したときのことだ。家に戻った亡骸を囲み親族一同が悲嘆に暮れているとき、長女夫婦の生後三ケ月にしかならない赤ん坊の存在が大きな力を発揮したのだった。「赤ちゃんがここにいてくれることが、これほど有難いとは！」と、みんなが口々に話したものだった。赤ん坊のもう一人の祖父としてちょっぴり誇らしかったのを思い出す。その存在の持つ力は、確かに、大人たちを十分に癒し元気づけていたのだった。

この時代に学校カウンセラーをしているせいか、「かくあるべきだ」という言葉が過剰なのが気になる。「高校生ならかくあるべきだ」「教師なら…」「親なら…」…それはそうだが、「そう言われてもできないときはどうするの？」という気持ちになる。それを言う人にとっては善意でも、期待通りに動けない人にとっては、「それができないあなたはダメ人間だ」というようにしか受け取れないことが多いのではないか。世の中に「かくあるべき」の言葉が増えるほど、元気と希望を奪われる人間の数が増えるような気がする。

これと比べると水芭蕉は、お節介を言わず黙って人を元気づける。無心に微笑む赤ん坊と同じだ。小蓮華山の登山道やその傍らの這松もそうだ。こう考えると私たちは変に賢くなり過ぎたのかもしれないと思えてくる。

私は歳を重ねるごとに、「少しくらいの知恵やお金ではどうにもならないことがいっぱいある」と思うようになった。その経験が私を成長させたとすれば、「あなたはこうあるべきです」などの言葉を使う回数が減ったことだろうか。それは少しだけ水芭蕉に近くなったということだろう。しかしまだまだ中途半端である。『坂の上の雲』のラストシーンの、あの小蓮華の風景が、心の底から魅力的に見えるのは、その憧れと（あの風景が）つながっているからかもしれない。

大津のいじめ自殺、いたましい事件である。こんな事件があると、また「かくあるべきだのに」の言葉が増える。すべてもっともな意見だ。だがどれほど意見を拝聴してもすっきりしないものが残る。それは当事者を非難するだけのものだからだ。子どもは大人の鏡である、他者の立場を理解しようともせず、ひたすら鬼の首を獲ったような得意顔で他者を非難する社会を、彼らがまねたから、あの事件が起こったのだ。つまり社会全体の「非寛容さ」（他者の心への想像力の欠如）が悪者なのだ。なぜ、こんなに世の中が寛容さを失ったのか？　水芭蕉に聴いてみるがよい。

二〇一二年七月

学校カウンセラー　森口　章